

幼児身体学の概要と課題

Übersicht und Aufgabe zur Infantile Somatologie

キーワード：幼児身体学、現象学、脱構築、間身体性

Schlüsselwörter: Infantile Somatologie, Phänomenologie, Abbau, Interleiblichkeit

武藤 伸司

MUTO Shinji

はじめに¹

「幼児身体学 (Infantile Somatologie)」とは何か。この問いに対し、まず前提として確認しておかねばならないのは、この名辞の上位概念である「身体学 (Somatologie)」の内実である。身体学とは、現象学という哲学の一分野であり、一言で言えば「身体における諸感覚の分析とその志向的な構成 (intentionale Konstitution)²の如何に」を探究することである³。それは、「身体」という意識の現出について、五感や運動感覚 (キネステーゼ (Kinästhesie)) の分析からその本質規則性を直観し、それが如何にして構成されているのかを研究するものである。そのような身体学において、特に「幼児」というある種の独特な身体性に着目し、我々の身体における諸感覚の「発生 (Genesis)」という事態を解明しようとするのが、幼児身体学ということになる。

しかしながら、なぜ殊更に幼児の身体性が問題にされねばならないのか。また、一見すると、こうした課題は、発達心理学や幼児教育学の分野であり、哲学という分野がその課題を扱う必要性は自明でないように思える。あえてこれらの問題を哲学的に探究する理由は何なのか。その理由の一つとして考えられるのは、哲学という学問の性質である。少々迂遠ではあるが、その点をまず確認したい。

哲学は、諸学問の前提を問うという理念を持つ

ている。それは、ものごとの根源を問うという「態度 (Einstellung)」を意味している。こうした理念と態度において、我々の最も身近で、当たり前すぎて気にも留まらないこの身体こそが、まさに人間的な活動の全てを下支えているものとして捉えられ、哲学の課題となる。さらにそこで、その身体の在り方や成り立ちといった前提を問おうとするとき、その眼差しは、「根源からの発生」へと向けられる。例えば、我々は、例外なく乳幼児から次第に成長してきた。つまり我々は、経験の積み重ねという意味での歴史を、精神的にも身体的にも担っているのである。そうであれば、成人である我々の身体や認識、それを支える諸感覚が成立しているということの根源的な理由を問おうとするとき、その歴史の始まりへと遡上し、その萌芽と発生のプロセスを解明することが求められる。それはまさに前提を問うという哲学固有の問い方である。したがって、幼児の身体性を問題にすることは、身体学という哲学にとって重要な探究領域の一つとなるのである。

だが、上述のような幼児身体学の目的も、やはり発達心理学や幼児教育学といった既存の諸学問のそれとも、それほど差がないように思える。そうであれば、それらの学問領域に任せていけばよいのではないだろうか、という疑問は当然提示され得るだろう。そこで本論は、この疑問について応えるべく、それらの学問と、現象学ないし幼児身体学が、如何なる点において異なるか、すなわちそれらの探究内容とその方法

論⁴が如何なる点において異なるか、ということを示す。そして、幼児身体学が概要としてどのような内実を持ち、どのような探究の課題を持つのかも、併せて提示したい。以上のことから、本論は、幼児身体学という学問領域の内実を規定するものとなるだろう。

1. 幼児身体学の方法論

現象学の探究において特徴的な点とは何か。それは、「意識における諸現出」を分析することである。つまり、我々自身の意識に生じている感覚や知覚、表象、判断などの、いわゆる一人称的な体験という、意識における内在的な構成の仕方（意識の働き方）を研究対象にするのである。この点は、主観的な体験を私的なものとして、それを客観的なデータではないとし、それ故学問的な研究の対象にはならないとする自然主義的な学問（すなわち科学）の考え方は、大きく異なっている⁵。そこで現象学は、学問におけるそのような自然主義的な態度から、上述の「意識の現出」という研究対象へと視線を向け変え、現象学的な態度へと変更することによって主観的な事象を解明することになる。そして同様に、幼児身体学も、このような態度において幼児の身体性の本質を捉えようとすることになる。その際、確かに現象学の範疇に位置する幼児身体学も、乳幼児の観察を行うこともあるが、しかしそれは、単に乳幼児の外面的な表現や特徴の分析や総合に留まるのではなく、その感覚と発生の本質規則性を、乳幼児の体験から掘り上げることが、探究の第一の目的となる。

とは言え、探究の大本となる現象学が個々人の意識体験を分析すると言っても、それは自らの意識体験を主とし、また他者の記述的な言明を基にして探究を進めるのが基本である。だとすれば、探究の足がかりとなる証言や記述のための言語すら未だ持たない乳幼児の体験を問うことは、不可能なのではないか、という疑問は当然生じるだろう。上で「掘り上げる」といったことは、如何なる意味で解されるのか。この疑問に対し、幼児身体学は、一般的な成人に対する現象学的な探究とは異なる、幼児身体学に特有な方法論を用いてそれに応える。その方法論が発生的現

象学における「脱構築 (Abbau)」(HuaXIV, S. 115) という方法である。この脱構築という方法が、その他の諸学問と幼児身体学を分かち重要な点である。だが、その考察に入る前に、この方法を理解するための諸前提を確認しておこう。

a) 自己と他者の発生を問うこと

現象学の始祖であるフッサールは、他者の主観、すなわちその認識や存在について探究する際、「我々は、感情移入 (Einfühlung) を通じて、有機的な個体を、生気が与えられたものとして統握する」(HuaXIV, S. 116) と述べている。差し当たり、「統握 (auffassung)」とは、対象に対して主観が意味付与し、解釈する、ということである。そして、上の言明で特に重要なことは、「感情移入」という現象学における特有の術語である。その意味は、「身体的な現出における意味の理解」、ということである (vgl. HuaIV, S. 224)。その内実は、他者の身体に対し、そこに自己を置き入れることによって、自己と他者との類似性や差異性を生じさせ、自己と他者の「対化 (Paarung)」(HuaI, S. 142) を成立させるという、無意識的な構成⁶を示している (vgl. HuaI, §43-45, §51)。こうした無意識的な感情移入が生じているからこそ、我々は、他者に対して自分と同じように生きた身体を持ち、感情や思考といった心を持つと解釈するのである。そして、このことを基礎にして、我々は、「他者の経験の発生」についても語るができるようになる。

まず、「発生」ということについて確認しよう。フッサールは、「我々の経験の中に、我々のあらゆる事物知覚の中に、可能的な経験の地平 (Horizont) が横たわっていて、そしてそのことと共に、可能的な経験の地平は、それらの段階形成を持ち、その段階形成に相応している低次の統覚、低次の経験の仕方が制限された地平と共に発展せねばならないといった、経験の発生を指し示している。〔その経験の発生は、〕さらに新たな経験の連関を通じて、新たな経験の統一、高次の地平を通り抜けた高次の段階の経験などに発展する」(HuaXIV, S. 115) と述べている。我々の経験は、単に外界の諸情報を素朴に受け取るだけで成立するのではなく、意識における構成の

プロセス、すなわちここで言明されている段階的な形成によって成立している。例えば、我々の目の前にリングがあるとする。そのリングに対して我々は、そこから得られる赤い、丸い、甘い匂い、光沢感、などの感覚与件を得る。だが、そうした単純な感覚の情報だけを集めれば、「リング」という判断が成立するわけではない。それらの感覚的な与件の集積に、リングという「意味」や、その意味に纏わる記憶、イメージなど、様々な周縁の情報(差し当たり、これが「地平」と呼ばれているものである)が付加されることにより、「これはリングである」という総合された表象、知覚、判断が生じるのである。つまり、我々の認識や経験は、感性的な直観を得て、さらに悟性的な判断をする、という構成のプロセスを持っているのである(vgl. HuaXIX/2)。そしてこの構成において重要なことは、意味の学習や記憶の蓄積といった経験の積み重なり、すなわち意味付与する内容の「歴史的な発展も同時に考えられる」ということでもある。

また一方で、感覚与件を所与することや、理念的な意味内容を獲得することは、まさに学習や記憶という過去と未来に関わる時間性を意識が有していることに他ならない。現在における認識や経験の意味が新たに獲得されるということは、そうした過去の記憶を留め、未来への予期を投企することの編み合わせによって成されている。発生ということの内実には、そうした時間性も含まれていることも見逃してはならない。したがって、フッサールが述べるところの「段階の形成」とは、構成プロセスと歴史性(時間性)を同時に意味しているのである。

b) 脱構築という方法

しかしながら、自らの体験や身体についての意識の発生を問おうとするとき、その歴史性において遡って言及できない領域がある。それは、自我の発生以前の体験、すなわち乳幼児期の体験である。人は、誕生してから次第に成長していく中で、いつの頃からか自我が芽生え始める。いわゆる「物心がつく」というタイミングである。一般に、我々が辿りきれぬ記憶の最古のものは、このタイミングに概ね相応していると言い得るだろう。だがそうであるとすれば、それ以前

の体験の発生の過程は、体験として言明できないがゆえに、分析できないということになってしまう。この点を解決するために、フッサールによって考え出された方法が、まさに脱構築なのである。以下から、この脱構築の内実を確認することとする。

脱構築という方法について、フッサールは、「我々は、ある特定の仕方において、我々の完全な経験(知覚、原本的な経験の統覚)を体系的に脱構築できるのである」(HuaXIV, S. 115)と述べている。この言明における「経験を脱構築する」とは如何なることなのか。これについてフッサールは、「もし、我々がある特定の経験を発生から遮断し、つまりある特定の経験のグループを一切可能ではないとした場合、我々は、どのようにして知覚がその地平に即して手に入れねばならなかったのか、ということを考えてみることができる」(ebd.)とも述べている。この記述にしたがって、実際に我々もその操作を行ってみよう。

例えば、我々の身体における運動感覚(キネステゼ)を、これまで一切働いていなかったものとして想定してみる。すると当然、我々は、運動の感覚を持ち得なかったということで、その場所から動いたことがない、ということになる。人は、身体各部の可動域や行動範囲によって、対象への接近と離脱を繰り返し、距離感や奥行きといった空間認識を構成するが、それが可能でないとすれば、我々はそうした認識を持ち得ないということになる。したがって、今、我々に空間という認識として距離感や奥行きという経験が成立しているというのであれば、その構成の根底に、運動感覚が必然的に働いていなければならないということになる。

このように、ある特定の構成要件を除外して、これまでの自分の持ち得ていた経験がそれによって成り立たなくなるとことが論証されれば、逆説的に、その構成要件は、実は欠くことのできない本質規則性である、ということが「必自然的な明証性(apodiktische Evidenz)」にもたらされることになる。この方法を応用すれば、問題となっていた自我の目覚め以前の発達段階の規則性を呈示することができるのである。これについて、フッサールは、「もし、私が成熟した人間主観であるのなら、この[脱構築による論証の]ことを

正当であると言い得るが、属している超越的な統覚共に、私の（上述の意味において正当に解釈された）未成熟な、ないし子どもの発達に関しても十分に言い得るのである。〔つまり、〕私が言い得るというだけでなく、子どもが、私が見ると同じ事物を見ていても、その事物について未だ完全に形成された統覚を持たず、子どもには高次の地平が未だ欠けていて、また、子どもが当該の事物を子供として見るとしたときと、我々が見るとしたときのどちらを通り抜けても、これこれの新たな動機を〔子どもが〕受け取っていないので、未だその事物の経験が組織化できていないと、そのように言えるのである」（HuaXIV, S. 115f.）つまり、脱構築を感情移入と合わせて考えれば、探究者自身の感覚と、他者、特にここで主題となっている乳幼児の諸行動を分析することができるということである。他者の経験に対し、感情移入によって自らの経験を置き入れることができるのだとすれば、自らの経験の段階的な形成から、他者のそれも同様に考えることができる。成人と子どもを対照させる中で、成人である探究者の感覚構成の中で働いている諸規則性を、あえて脱落させれば、我々は、自他の区別を保持しつつも、それを越えて、認識や経験の根源を捉えることができるようになる。したがって、幼児身体学は、この方法を用いることによって、乳幼児における身体性の諸特徴、諸様態の解明を目指すことになる。

2. 幼児身体学の諸前提

以上のような方法によって、乳幼児の身体性の解明が目指される。その上で、本論が提示せねばならないことは、繰り返しになるが、幼児の身体性から見出される必自然的な感覚構成の諸本質規則性を看取し、感覚、身体、自我、そして他者の他者性が如何にして「発生」するのか、という課題を掲げる理由である。そこで、まず、我々が確認せねばならないのは、身体学ないし幼児身体学の母体である現象学が、なぜそうした事象を問題にせねばならなかったのか、という根本的な点である⁷。この問題は、本題に対して少々遠回りの議論となるが、前提として言及しておくこととする。

フッサールが意識に現れる諸事象が志向的に構成されると考えたことは、これまで述べた通りである。彼は諸事象の構成におけるこの意識を、「超越論的主観性 (transzendente Subjektivität)」と呼ぶ。現象学における「超越論的」という言葉の意味は、様々な存在する世界の諸事物、諸事象が素朴に存在すると自然に受け取るのではなく、それをあえて自明なものではないとして、その意味や成立の過程を問う「態度」のことである。そうした態度において、それら諸対象の意味や成立過程自体を問えば、それは、人間の認識を担う主観性の諸能力の問題となる。したがって、この超越論的主観性という術語は、現象学において二つのことを意味する。一つは、世界の諸対象を構成し、認識する意識の固有の能作 (Leistung)⁸ であるということ、そしてもう一つは、その主観の働き方、仕組みを問うという哲学的な探究の主題そのもの表す標語でもあるということ、これらである。

さて、この超越論的主観性において、意識における現出が構成されると考えるとき、問題となるのが、その主観である「この私」、すなわち自己意識と、そしてその対となる、私以外のもの、すなわち自然的な事物も含めた「他者」である。現象学は、超越論的主観性の志向的な構成を分析するのがその探究の目的であるが、そこで見出されることは、「あらゆる形式における超越とは、内在的な、自我の内部で構成されつつある存在性格である。思考可能な意味のそれぞれ、思考可能な存在のそれぞれは、それが内在的であれ超越的であれ、意味や存在を構成しつつあるものとして、超越論的主観性の領分に含まれる」（HuaI, S. 117）ということである。だとすれば、超越という私の他者、ないし異他なるものは全て、結局のところ、志向性という両者の関係を表す概念の中に包含される。言わば、超越論的主観性の外部というものはないということになる。こうした独我論にも陥りかねない徹底した主観性の分析において、我々の意識に現れている私自身についての認識や、それ以外の事物や他者の構成とは、如何なるものなのか。この問題について、フッサールの分析を確認する必要がある。そこで我々は、超越論的主観性による自我と他者の構成プロセスを見ていくこととする。

a) 自我の内実とその発生

フッサール現象学における「自我 (das Ich)」という術語は、意識における様々な作用を「能動的に遂行すること (das aktive Vollziehen)」¹⁾、という意味である。作用とは、常に対象を何らかの意味を持つものとして統握するということであり、そしてその統握の仕方は、上述の通り、表象であったり、判断であったり、欲求であったりと様々である。これら意味内容と様々な統握の仕方が合わさることによって、意識の現出が構成される。この構成という作用を遂行する「同一者」がまさに自我と呼ばれるのである。

ところで、この作用の遂行者である自我は、なぜ同一と認められるのか。我々の意識における現出は、様々な意味と統握による構成の結果であるが、我々の信念や見解、思考、判断などは、常に一定ではないし、環境や状況によって揺れ動くものである。意識とは、そうした構成内容の数多性や多様性において常に変化している。つまり、ここで考えるべき問いとは、その都度の流動的な「意識生 (das Bewußtseinsleben)」²⁾の中で、作用を担う同一者としての自我というものが、そもそもあり得るのか、というものである。実際のところ、自我というものは、不変の魂であったり、精神的な実体であったりといった、我々が思うほど確固たる存在ではない。例えば、精神の病である統合失調症 (幻聴や幻覚、健忘など) を思い起こせば、意識の軸ないし基盤であるはずの「この私」という自我が崩壊するということも考えられる。こうした自我の在り様から、我々が素朴に考える「私の自己同一性」は改めて問いに付されることになる。

自我が変化し、崩壊の可能性も孕むということは、例えば、自我は不変の実体ではなく、生成される極としてのメルクマールに過ぎないということになると考えられる。だが他方で、これについてフッサールは、そうした自我の可変性ないし可塑性を「習性の基体としての自我」 (vgl. HuaI, §32) であるとも考えている。それはつまり、その都度の思念や確信を自らのうちに沈殿させていき、持続的な個性を形成していく、ということである。これが、いわゆる「人格としての自我」 (HuaIV, S. 175) であり、上述の「極」としての形式的な理解とは異なるものとしてフッサールに提示され

ている。意識、すなわち超越論的主観性が様々な様相を呈し、そうした変化の全てが沈殿して持続性が保たれることで、それは歴史性を帯びる。その歴史を丸ごと担って、持続的に同一性を保つという、時間的な自己構成を為す超越論的主観性の働きこそが、自我と呼ばれるもの本来的な姿なのである。こうした歴史性と時間性から、まさに自我は、超越論的主観性において「発生しつつあるもの」として理解されるのである。

b) モナドと間主観性

では、こうした形式的な極でもあり内容 (歴史性) を持った人格でもあるという両義的な解釈を許す自我を我々はどうに理解すればよいのか。フッサールは、こうした両契機を含む自我の性質を、本質的には体験の志向的な構成と、その構造の全体を意味するものとして捉え、対象世界との関わりも包括した具体的な在り方から、「モナド (Monade)」 (vgl. HuaI, §33) と呼ぶようになる。このモナドという語は、近世の哲学者であるライプニッツの『モナドロジー』という著作で用いられた「モナド」、すなわち「単子」という術語に由来し、それをフッサールが新たな意味を付加して、現象学の術語としている。上述のように、自己と他者、すなわち世界の全てを内在的に構成する自我の作用は、独我論に陥る危険性を孕んでいる。しかしながらフッサールは、そうした超越論的主観性をモナドとして捉えることで、多元論的な自我のあり方を主張する。では、なぜ自我の存在を多元論的に主張できるのか。素朴に考えれば、我々は、たった一人で存在しているのではなく、複数の他者と共に生きている。そして、それぞれの他者に人格と歴史性、すなわち自我を認める。しかしながら、自我による能動的な構成からだけでは、そうした他者の自我を認めることは、困難に思える。そこでその困難を克服するのが、上述の感情移入の考え方である。

フッサールが用いるモナドの意味は、ライプニッツのそれとは異なると述べたが、それは如何なる点であるのか。ライプニッツは、モナドには「窓がない」としている。この「窓」とは、モナド同士の「関係」ということを示している。ライプニッツの考えでは、モ

ナドは実体⁹であり、モナドはそれゆえ独立であるという。そしてモナドは、個々別に宇宙を表出しているとも述べている。世界をモナドの集合だと考えたとき、モナド同士は関わり合いがあるように思えるのだが、しかしそこには、実体という規定から、コミュニケーションがないとライプニッツは考えていた。その集合における関係は、ただ神という超越的な存在による「予定調和」によって、成立しているのである。それに対しフッサールは、ライプニッツと異なり、モナドには「窓がある」と主張する。これは、各モナドが、志向性、特に無意識的な「受動的志向性 (passive Intentionalität)」と呼ばれる働きによって関係づけられているということである。フッサールは、「窓を通り抜けることによって (窓とは感情移入である)、別の主観を経験し得る」(HuaXIV, S. 260)と述べており、感情移入という志向性におけるモナド間の関係づけが可能だと考えるのである。むしろ、こうした志向的な関係をモナド同士が結べるからこそ、感情移入という他者経験を通じて、それぞれの主観の間に同一で客観的な世界の認識が構成されるのである。フッサールは、この議論を通じて、自我の作用における独我論を退け、また神を必要とすることなく、「間主観性 (Intersubjektivität)」という哲学史上初めての他者論を展開するに至ったのである。

3. 幼児身体学の求めるもの

ここに来て、ようやく我々は、幼児身体学の核心へ触れることができるようになる。これまでの議論において提示されてきたキーワードは、感情移入、発生、脱構築、自我と他者、そして間主観性であるが、これらの議論の道筋から、我々は、さらに人間存在の深淵へと入り込むことができる。それが、「間身体性 (Interleiblichkeit)」である。まさにこの概念に到達し、その内実を具体的に理解することが、幼児身体学の核心に他ならない。

フッサールによって提示された間主観性は、大まかに言えば、自我と他者の自我の間に成立する共存関係ないし共通理解ということになるだろう。これに対し、フッサールに学んだメルロ＝ポンティは、そうし

た自我という思考や認識、感情といったレベルの共通理解よりも、さらに深い感覚の共存関係、すなわち、「身体の共鳴」こそが、最も根源的であると考えた¹⁰。我々は、他人の心を知ることはできず、せいぜい言語を介して思考の共通理解を図るのが、一般的な相互理解のあり方にすぎない。しかしながら、フッサールの提示する感情移入の内実を考えれば、身体の類似性の直観という感覚や感情といった感性のレベルでのコミュニケーションが見出せる。メルロ＝ポンティは、まさにその身体的な共鳴に重きを置くのである。そしてさらに、発生ということを考えれば、すなわち、そうした言語操作を伴う目覚めた自我による活動の成立以前の体験を考えれば、脱構築によってまさに幼児の身体性の在り方に哲学の求める根源が見えてくる。つまり、「なぜ我々が固有の自我を持ち、なぜ我々が心を覗けない他者を私と同じ主観を持つ人間だと認め、なぜ我々が他者に共感し、しかしすれ違ひながら共に生きていけるのか」という疑問に答え得るだろう原理が、乳幼児期の身体性を分析することによって分かるのではないかと、という作業仮説ないし探究の見通しが成り立つのである。例えばこのことによって、感情移入と言われることの内実が、逆に具体的な事例を持って帰納的に論証されることも可能になる。

したがって、幼児身体学は、哲学的な理念と方法論を持って、「私とあなたの関係」の原理の探究を、幼児の発達過程を介して研究することになるのである。具体的には、乳幼児にとっての初めの他者、すなわち母親や養育者との関わり合い方が重要な契機として考えられることから、そうした具体的な事例を手引きにして、研究を進めることとなる。これについては、発達心理学がすでに多くの研究成果を提示している。ピアジェやスターンといった乳幼児の発達の観察を範例にして、そうした事実から本質を見出すのも、また現象学の仕事の一つである。この点については、メルロ＝ポンティが「幼児の対人関係」¹¹という論文で、感覚の議論から鏡像、伝染泣きなど、間身体性の事例と見られる事象を多数分析している。また、ラカンが行ったような精神分析も、乳幼児における世界認識の発達という理解において、その論も有用

であろう。また近年、脳科学の発達も相俟って、未だ物言えぬ乳幼児の感覚や認識に関連するデータが多数提示されている。幼児身体学は、現象学の方法論を基本としながら、そうした諸学問の成果を活用し、本質直観へ至ろうとする。特に、重要性の高い、喫緊の課題であると考えられるのは、乳幼児の運動性や社会性の形成という問題系に関する子と母ないし養育者の「触れ合い」である。すなわち皮膚感覚における「触覚」という身体性がそれらの発生に欠かせないことを理解することも必要であると考えられる¹²。現象学ないし哲学は、こうした諸学問との関係の中で、探究を進めることができるのである。

しかしながら、実際のところ、以上のような学際的な研究を基本とする幼児身体学は、現場で生じる諸現象の何を具体的な考察と件とするべきか。あるいは、現場の養育者や教育者、研究者たちから、どんなデータの提供を受ければよいのであろうか。これまでの議論から、研究を進めるために重要視すべき点は、我々と子どもとの関係において生じる「感覚と感情」になると考えられる。具体的には、新生児の本能的衝動的な行為、乳幼児の好奇心や興味関心といった「動機」、身体的な運動の変化(何かが「できるようになった」という場面)に注目するのが有効であると考えられる。つまり、感覚、感情、運動などの変化や、その変化の強度が高い場面や状況を捉えることで、子どもや養育者における固有な経験にアクセスしやすくなると考えられるのである。例えば、スポーツ運動学の運動観察の基礎的な態度として「運動モルフォロジー」という考え方があり¹³、それに基づいた「代行」という発生分析の方法論がある¹⁴。運動モルフォロジーとは、ある意味を持った運動全体の、「形成過程自体」を捉える運動観察の理念である。運動や五感、感情の変化は、志向的な意味内容を持ち、かつ変化しつつ全体の統一を形作る。それを自然科学的分析のようにある時間単位で細切れにして、一個一個を説明することとは異なり、その全体をそのものとして捉えるという、動的な対象を観察する際の態度を示している。そして、代行とは、「学習者が運動感覚能力を図式化するのを助けるために、指導者が自らの運動感覚世界で、学習者の代わりに運動図式

を構成化」¹⁵することである。ここでの学習者と指導者の関係を、子どもと養育者、研究者の関係に置き換えれば、子どもの運動や感覚、感情の形成ないし成立の過程を、養育者や研究者が代行して記述することになるだろう。こうしたスポーツ運動学の発生分析に関わる方法論は、運動やその技の記述に特化しているとは言え、上述の感情移入や脱構築の方法論に相通じる点を持っており、それを具体的に体现したのものとして、身体性の研究において非常に実用性の高い理論である。これらの理論と方法に基づいて乳幼児の身体を考えるのならば、現場の諸現象を掘り上げ、それを研究に用いることができるようになるだろう。

しかしながら、乳幼児の心的な部分に入り込み、それを記述するという感情移入や代行の能力といった、その豊かな経験の場面をありのままに掴まえることは、実際のところそう簡単ではない。金子は、「学習者がもっている運動感覚の類似図式を模索して、それを統覚し、図式化してやる代行能力が主題化されるのだから、指導者自身の運動感覚の【創発能力の実力】が試される」¹⁶と述べ、その能力自体の訓練の必要性を指摘している。こうしたことは、現場における経験と感性に裏打ちされた言わば職人技であり、一般の人が容易に、即時に取得できるわけではない。その観察技法はどれほど対象に触れたかという経験の蓄積を必要とすることから、単にマニュアル化できるわけではないし、その観察の仕方や、それについての言及の内容を外から見れば、曖昧にも感じられるだろう。そうだとすれば、曖昧さを排除した脳科学や認知科学のような手法で、電極をつけて脳波測定や血流の変化を調べるということで、客観性を担保すればよいと指摘されるかもしれない。しかし、幼児身体学で目下考えている方法は、そうした科学による量的なデータの取得ではなく、質的なデータの取得である。上述の「動機」や「変化」、「強度」という着眼点を研究するということは、乳幼児の生活の中で、成長の中で、養育者、教育者、研究者が「現場で感じ取り、記述すること」によってその事態を提示することである。こうした「現場での感性的な記述」というのは、近年、「質的研究方法」と呼ばれ、経験科学の領域で用い

られている¹⁷。曖昧だからと言って、それが即無効であるというロジックは早計過ぎると考えられる。そもそも、科学的に量的な数字や記号で事態を表現したからと言って、結局はその記号を一般性として「解釈」するのは「意味と価値」に他ならない。それらは、まさに現場に関わる養育者や教育者、研究者たちが直接捉えているはずのことであろう。こうした具体的な経験を研究することが、「曖昧である」と批判されることに対しても、その再批判と厳密な方法論を、正面から研究する必要がある。しかしながら、それはまた別の課題として、稿を改めて述べる必要があるだろう。

おわりに

以上のことから、これまでの議論は、根源への探究における方法と目的を提示するという、研究のとば口を示したに過ぎない。幼児身体学は、上位概念である身体学が学問的な身分を確立する途上であるがゆえに、未だその体系は構築段階である。しかしながら、両方も現象学を母体としていることから、その先行研究を利用して、これらの探究を展開することは可能であると考えられる。そのことを通じて、本論および本研究は、幼児身体学という学問的な領域を提示するための試論ともなるだろう。

*本論は、科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)若手研究B(課題番号16K16497)の支援を受けてなされた研究、その成果の一部である。

注

¹ 凡例: *Husserliana*からの引用は、Huaと略し、巻数をローマ数字、頁数をアラビア数字によって()内に示す。また、引用文に無い語句を補足する場合、[]内に示す。

² 「志向的な構成」とは、本文中にも示すが、意識がそこに現れる対象を作り上げること(意味付与)である。特に「志向的」という点が重要であり、その意味は、意味付与する主観の能力と、それと関係する感覚的な対象との相互関係を示している。認識がどちらか一方によって成立すると言うのではな

く、常に関係の中で主観と対象の両方が同時に成立可能であるという本質を、「志向的」ないし「志向性(Intentionalität)」という語は含意している。

³ 身体学の内実について、拙論「身体学」の研究課題「東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要第51号所収、東京女子体育大学、2016年、49-58頁を参照のこと。

⁴ ここで用いられている「方法論」という語は、哲学では一般的に「方法自体の論究」という意味である。探究や思考において、どのような方向で、どのような仕方に対象を捉え、分析、考察するかということ自体を問題にすると、この語が用いられることが多い。本論でも、この意味で「方法論」という語を使用することとし、それ以外の意味を念頭におくことはない。

⁵ この点については、上掲の拙論と、エドムント・フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷恒夫、木田元訳、中央公論社、1974年を参照のこと。

⁶ この無意識的な構成を、現象学では「受動的綜合」と呼ぶ。詳細については、エドムント・フッサール『受動的綜合の分析』山口一郎・田村京子訳、国文社、1997年を参照のこと。

⁷ これについては、上掲の拙論において言及したことではあるが、本論ではまた別の観点から、改めて考察する。

⁸ 「能作(Leistung)」とは、現象学に特有の術語であり、この意味は、「意識の無意識的な働き」、という意味である。逆に、「意識的な働き」を言う場合は、「作用(Akt)」と言われる。

⁹ 「実体」という概念は、それをを用いる哲学者によってその内実は細かく異なるが、基本的には、「他のものに依存せず、自己自身によって存在するもの」という意味で捉えるのが一般的であろう。特にライプニッツは、多元的な精神をモノイドと規定し、それぞれを実体であるとした。

¹⁰ M.メルロ=ポンティ『シーニュ』1、竹内芳郎監訳、みすず書房1969年、および、M.メルロ=ポンティ『シーニュ』2、竹内芳郎監訳、みすず書房1970年を参照のこと。

¹¹ M.メルロ=ポンティ『眼と精神』滝浦静雄、木田

元訳、みすず書房1966年、97-192頁を参照のこと。

¹² 山口創『子供の「脳」は肌にある』光文社新書、2004年を参照のこと。

¹³ 金子明友「運動観察のモルフォロジー」『筑波大学体育科学系紀要』第10巻、筑波大学体育科学系、1987年、113-124頁を参照のこと。

¹⁴ 金子明友『わざの伝承』明和出版、2002年、526-529頁を参照のこと。

¹⁵ 上掲書526頁参照。

¹⁶ 上掲書同所参照。【 】内は原文において強調されている。

¹⁷ 末武康弘、諸富祥彦、得丸智子(さと子)、村里忠之編著『「主観性を科学化する」質的研究法入門』、金子書房、2016年を参照のこと。

参考文献

〈Husserliana〉

Bd. I: *Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge*, hrsg. von S. Strasser, 1950. (邦訳:『デカルト的省察』浜渦辰二訳、岩波書店、2001年)

Bd. IV: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Zweites Buch. Phänomenologische Untersuchungen zur Konstitution*, hrsg. von M. Biemel, 1952. (邦訳:『イデーニII』全2冊(II-1, II-2)立松弘孝・別所良美訳(II-1)、立松弘孝・榊原哲也訳(II-2)みすず書房、2001年(第1巻)、2009年(第2巻))

Bd. XI: *Analysen zur passiven Synthesis*. Aus Vorlesungs- und Forschungsmanuskripten (1918-1926), hrsg. von M. Fleischer, 1966. (邦訳:『受動的綜合の分析』山口一郎・田村京子訳、国文社、1997年)

Bd. XIV: *Zur Phänomenologie der Intersubjektivität*. Texte aus dem Nachlass. Zweiter Teil: 1921-1928, hrsg. von I. Kern, 1973. (邦訳:『間主観性の現象学I その方法』浜渦辰二・山口一郎監訳、ちくま学芸文庫、2012年)

Bd. XIX/2: *Logische Untersuchungen*. Zweiter Band. Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis. Zweiter Teil, hrsg. von U.

Panzer, 1984. (邦訳:『論理学研究』第4巻、立松弘孝訳、みすず書房、1976年)

エドムント・フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷恒夫、木田元訳、中央公論社、1974年

金子明友「運動観察のモルフォロジー」『筑波大学体育科学系紀要』第10巻、筑波大学体育科学系、1987年

金子明友『わざの伝承』明和出版、2002年

M. メルロ=ポンティ『眼と精神』滝浦静雄、木田元訳、みすず書房1966年

M. メルロ=ポンティ『シーニュ』1、竹内芳郎監訳、みすず書房1969年

M. メルロ=ポンティ『シーニュ』2、竹内芳郎監訳、みすず書房1970年

武藤伸司「「身体学」の研究課題」東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要第51号所収、東京女子体育大学、2016年

末武康弘、諸富祥彦、得丸智子(さと子)、村里忠之編著『「主観性を科学化する」質的研究法入門』、金子書房、2016年

山口創『子供の「脳」は肌にある』光文社新書、2004年